

一写一筆

静岡の今

温暖化が進む「花の都」

立春が過ぎ、各地の花便りが心楽しい季節となった。伊豆半島には下田・爪木崎の群生水仙、早咲きの河津桜、熱海梅園。花巡りしながら東海道を西に進めば「はままつフラワーパーク」にたどり着く。

静岡県は「切り枝」の作付面積・出荷量日本一、700品目を超える花き栽培・出荷されている。温暖な気候、低地から高地まで起伏に富んだ地形、豊富な温泉など自然環境に恵まれ、百花繚乱の「花の都」となった。

西日本で記録的大雪となった1月24日、鹿児島県・奄美大島に115年ぶりの雪が降った。この日、県内でも山間部では雪が舞ったが、静岡市駿河区内にある静岡地方気象台の敷地内で観測される降雪量はゼロ。

同気象台の記録では1950年以降の65年間で静岡の降雪が記録されたのは最高で3センチ(3回)。静岡、浜松などの市街地ではめったに雪が積もることはない。

気象庁によれば、日本の年平均気温は、長期的に見ると100年当たり約1.16度の割合で上昇しているが、静岡は2.2度と高

い。「静岡は暖かい」という皮膚感覚を、観測データが裏付けている。

この暖かさ、花きにとっては天然の楽園だが、とかく「ゆるい」と言われる静岡人氣質につながっているとの厳しい分析もある。さらに昨今の異常気象が、いつ静岡を襲わないとも限らない。地球温暖化の影響で、2100年には静岡市の最高気温が43度に達するとの科学的予想もあるという。

水仙、梅、蠟梅ろうばい。温暖の静岡でも、寒さしいので咲く花は、なぜかゆかしい香りがする。

(県代表監査委員・富永久雄)

散歩道の蠟梅。開花は「例年より20日ほど早い」という静岡市葵区内牧、全日写真連山田康さん撮影

